

アダム・スミスから見る中国の儒道佛思想¹

尹 清 洙

I はじめに：東洋と西洋

アダム・スミスは生涯大きく二つの仕事をした。『国富論』（1776）の作業で彼は「経済学の父」と呼ばれるようになったが、『国富論』のキーワードは「分業、見えざる手（市場）、資本蓄積、経済成長、貿易、共生」であると筆者は理解している。

さて、その六つのキーワードを理解する際には彼のもう一つの作業である『道徳感情論』（1759）抜きではその本質が見えにくいと思われる。『道徳感情論』のポイントは、「シンパシー（同感）、内観、中庸」という三つのキーワードでまとめることができるだろう。

他方、中国では二千年ほど前から儒道佛思想の対立的批判を重ねながら「中庸」についての理解が深まってきた。

本稿の目的はアダム・スミスの仕事から中国の儒道佛思想の核心である「中庸」について考察しながら、最終的には「東西不二」という帰無仮説について検定を行いたい。

本稿の構成は以下の通りである。まず第Ⅱ節において、アダム・スミスの二つの仕事について考察してからその本質は「中庸」であるという結論を導き出す。第Ⅲ節では中国の儒道佛思想の変遷について考察した後、明代に来て陽明学の「知行合一」として集大成されたことについて述べる。そして第Ⅳ節では「知行合一」の本質について検討し、最後の第Ⅴ節では、本稿の結論をまとめる。

¹ 本稿は北東アジア学会第22回全国大会（2016年10月於：慶応義塾大学）での報告に加筆修正を加えたものである。報告に対して貴重なコメントを下された立命館大学名誉教授松野周治先生には感謝の意を表したい。また、日中友好懇話会主催の中国内モンゴルの探索の旅で偶然（？）出会った岡山大学の新村聡教授よりスミスの仕事の本質について大変示唆に富むコメントを頂いた。もちろん、本稿にありうるべき誤謬はすべて筆者の責任である。

II スミスのワーク：「胸中の公平な観察者」と「見えざる手」

ここでは、堂目（2008）に依りながら、アダム・スミスの二つの作業について整理する。堂目はスミスの『道徳感情論』と『国富論』において展開された議論を、社会の秩序と繁栄に関する、論理一貫した一つの思想体系として再構築した²。

まず、『道徳感情論』においてスミスは「社会的存在としての人間」は他人から関心を持たれることや同感されることを望む存在として定義し議論を展開した。富や高い地位は見るものに歓喜を与えやすいので、ここに資産形成の野心の起源があり、諸個人の野心によって資本は増大しその結果社会は繁栄する。しかし、そのような野心や欲望は「胸中の公平な観察者」の正義感によって制御されなければならないと主張した。そして人間のもっともハッピーな状態は「心の平静」にあると結論付けている。すなわち、スミスの『道徳感情論』の基本概念は「シンパシー」であり、人間には他人の感情を自分の心の中に写し取り、同じ感情を引き起こす認識能力があるとしている。しかし、そのような能力は他人の感情や行為を、同調できるものとして是認したり、できないものとして否認したりするような矛盾を引き起こし、そこで人間の煩惱が生じる。その解決策としてスミスはもう一人の自分である「胸中の公平な観察者」の存在を取り上げ、その存在がわれわれに社会的に公平な判断を教えてくれるとしている。そこでいう公平とは正義（他人の生命、身体、財産、名誉を傷つけないこと）と慈恵（他人の利益を増進しようとする）ことという二つの原則を指す。すなわち、スミスは人間には自他を分別する「利己的な心」と自他を分別しない「公平な心」という二つのものが同時に存在すると主張した。そして野心や欲望という利己的な心は決して悪いものではなく、社会の繁栄をもたらす要因となり得るが、公平な心の正義感覚によって制御されなければならないという「中庸」的な思想を持っていた。

このような認識論に留まらず、次に、スミスは『国富論』という具体的な実践科学を提示した。

『国富論』において、スミスは分業が豊かさを増進する根本的な原理であると主張したが、その理論はリカードなどを経てもっと洗練され、現代経済学のもっとも基本的な土台となっている。そしてその分業はまた「見えざる手」という市場を通じて公正な取引が行われると社会は最高に快適になると指摘した。しかし、彼が前提にした市場とはフェアな場合であって、アンフェアの場合には独占の精神が生ま

² 本稿でのスミスの理解は堂目（2008）をベースにしている。

れてくると説いた。すなわち、ここでも彼の「中庸」的思想が見えてくるが、フェアの場合には市場は互惠の場になるが、アンフェアの場合には競争の場になり市場は混乱に陥ると洞察した。

またスミスは経済成長のもう一つの大事な柱である資本蓄積についても深い考察を行った。すなわち、資本家の利潤追求という欲望によって行われる資本蓄積は労働者の雇用人数を増やし、結果的に国の富は増え社会は進歩するとしている。彼にとってフェアな市場による経済成長というのは、幸福に対する人間の幻想によってもたらされたものであり、貧困と失意の中で苦しむ人々に自然が差しのべる恩恵であった。逆にアンフェアの場合には、市場が失敗し独占に支配され、結局社会は行き場を失う。これはマルクスによっても指摘されたことであり、残念ながら我々はそのような資本主義局面に直面している。幸い、インターネットという「見えざる手」の普及によって時空間を乗り越えた情報発信が容易となり、中小企業と消費者の直接的なコミュニケーションが増えていることはスミスが望んでいたフェアな市場の形成を促しているだろう。

さらにスミスは貿易論を通じて、上記の理論を国際モデルとして展開した。すなわち、人間には自分が生活している地域や国へのシンパシーとして「祖国への愛」というものがあり、それは自分が住んでいる祖国の繁栄のために大事なものであるが、それは同時に他国への偏見を生み出す可能性もあると指摘した。そのため、貿易を通じて諸国民の交流が深まれば、お互いの偏見を和らげ、諸国民の経済的相互依存関係が深まり、共に豊かに生きることができると論じた。スミスにとって市場や貿易は単なる手段にすぎず、経済成長の究極的なゴールは万民の心が一つに結ばれて平静な状態で暮らせる幸福であった。

すなわち、スミスは「内観」を通じて、人間の本質は「胸中の公平な観察者」であるという認識を示したのち、その上で『国富論』という実践論を提示した。そのポイントは分業（先に分かれて）、市場（見えざる手を通じて）、交易（後で合流し、また一つになる）であって、中国語で言うところの「先分後合」である。『三国志』は以下のように始まっている。

「話説天下大勢、分久必合、合久必分」（そもそも天下の大勢は、分かれて久しくなれば必ず合一し、合一久しくなれば必ず分かれるのが常である）。

すなわち、無常が常であるという弁証法的認識論である。

Ⅲ 中国における儒道佛思想の変遷

中国の古代思想のルーツは易経にあり、それを基礎にして発展したのが道家思想と儒家思想である。易経の基本的な骨格に関しては三聖（伏羲・文王・孔子）と言われるように三つの段階に分けることができる。すなわち、易の卦の図形定義（伏羲、8卦と64卦）、易の卦と爻の文字定義（文王、64の卦辞と384の爻辞）、そして十翼（孔子の文王易への解説）という段階を経てその基本的な形が作られた。

直感に優れた伏羲は自然（宇宙）の動きやその循環法則を陰陽の二つの元素が波動する図形として表したが、その形而下的な側面についてもっと数理的・言語的な論理展開を行ったのが孔子によって創られた儒学であり、その形而上的な情報についてもっと重点を置いたのが老子を代表とする道家思想であった。

孔子と老子は同時代を生きた人物で、孔子は老子のことを「龍のような人」と評価しながらも、「仁」（自他同一）という理念を持って、塵世に入り積極的で現実的な実践論を提示しながら、庶民を救済しようとした。その後儒学は孟子などの数多い後継者によって『四書五経』などの学問形態として整備され、中国の二千年ぐらゐの封建社会の主流文化としてその地位を保ってきた。

孔子の倫理的で現実的な儒家思想が中国人の日常暮らしに大きな影響を与えたのに対して、老子の形而上学的で神秘主義的な思想は中国人の精神世界に莫大な影響を与えた。老子の『道徳経』³の基本的なメッセージは宇宙の基本原理である「道」を認識し、その流れに沿って生きることで本当に自由自在な人生が満喫できるということであった。

老子によると、「道」は万物が生まれる前に存在し、経験世界の外部に存在し、万物を生む存在で万物とは異なるものであるが、社会と自然の法則に通じる。すなわち、「道」には「有」と「無」の側面があり、「有」は我々が日常的に認識できるもので、「無」は存在するにも関わらず、我々が認識できないものである。人々が人欲を持って行動すると目の前に現れる「現象界」（有）しか認識できず、無欲で生きるとき「実在界」（無）を直感することができる。老子のこのような理解はプラトンの「イデア」概念を想起させてたいへん興味深い。

『道徳経』第2章で老子は、「善悪、長短、高低」などの概念を用いながら人間の常識というのは二項対立という分別心によって引き起こされたものであり、日常的な常識の世界を超えてやっと「道」の真実が見えてくると主張した。すなわち、人

³ 道徳経は次のサイトにて閲覧できる。www.daodejing.org

為的に作為的なことをせずに、二元性を超えた清浄な心理の境地で目には見えない自然の法則が理解できると説いた。また、その上で「慈悲、儉約、謙虚」⁴という具体的な実践論を提示した。

他方、漢の時代に中央アジアの商人らによって中国に伝わった佛教は、最初は異教として攻撃を受けたが、「空」、「縁起説」などの理念や、「戒・定・慧」などの実践論は道家と重なるところも多く、徐々に民間に浸透していった。特に唐の時代に佛教は全盛期を迎え、中国の伝統思想と融合しながら中国思想の中に吸収されて行った。

以下では、いくつかの時代に分けて、儒学を中心としながら、儒道佛思想の流れについてもっと詳しく追ってみたい。

春秋戦国時代

春秋時代における鉄器使用の開始という技術革命によって社会システムが急速に変化した。戦国時代になると、諸子百家と呼ばれる思想家たちが登場し、様々な新しい思想が形作られた。孔子、孟子などによって唱えられた儒家思想は理想主義的なものであったが、当時の統治者に必要であったのは混沌でバラバラになった国を統一できる合理的で現実的な政策であった。このため韓非子は荀子の性悪説を信じ、天下は利益のみに応じて動くという法家思想を展開した。周王朝の仁政は事情が変わった戦国時代には合わないという史的唯物論的な徹底的な合理主義者で、「術の有る君主は偶然の善に従わず、必然の道を行う」と言いながら、法術は必然の道であると主張した⁵。秦の始皇帝は結局彼の意見を取り入れて、中国を統一することができた。その背景には何百年の分裂と戦乱で、庶民の暮らしが破壊され、国の統一と安定を望む庶民の強いコモンセンスがあったと思われる。始皇帝は中国を統一した後、道路、貨幣、漢字などの基準化を図り、「里」を単位とした村の経済の安定化や国民の意思疎通には大きな貢献を果たしたが、焚書坑儒などの暴政を続けた結果、秦は短命で終わった⁶。

両漢時代

秦王朝の暴政を倒して漢王朝を立てた漢高祖は法家思想を統治理念としながらも、道家思想などの他の方法も模索した。文帝時代になると過酷な法家思想が秦帝国の

⁴ 『道徳経』第67章より引用。

⁵ 『韓非子』は下記のサイトにて閲覧できる。

<http://www.gushiwen.org/guwen/hanfei.aspx>

⁶ 史的唯物論による中国封建制の理解は大西（2003）を参照して頂きたい。

滅亡をもたらしたと認識した文帝は儒家思想を統治の根本理念と指定した。しかし、ここで言う儒家というのは荀子の思想であったので、法家と儒家の折衷的のものであったことが分かる。その理由は、国は統一されたものの、一部地域で依然として混乱が続いたため、王権を強化する必要があったからである。武帝の時代になって経済が豊かで社会が安定すると新しい統治理念が必要になったが、このとき脚光を浴びたのが董仲舒の「天人三策」であった。彼は諸子百家を排斥して、儒学のみを国家教学として据えるよう献策し、採択された。また、彼は「天人感応、天人合一」という道家思想にも似た思想の持ち主でもあった。彼は宇宙としての天には陰陽の二つの気が存在し、小宇宙としての人間には「性」と「情」があるが、「性」は人間の陽気をみて、「情」は陰気をみて判別したものであると説いた。情というのは人の欲望であり、人間の生理的欲求と社会的欲求が含まれる。人間は欲望を持っているがゆえに社会を構成し、社会的生活を行うが、個人の欲望が度を過ぎると社会的にならないので法律で欲望を制限する必要があると主張した。すなわち、彼にとって人間の欲望である情は決して悪いものではなく、適切に統制することで平和で豊かな社会を築くべきだと説いた。また、性は善でも悪でもなく、自然なものであり、聖人の性は善、賤人の性は悪、常人の性は善にも悪にもなりうるという「性三品説」を提示した。すなわち、孟子の性善説と荀子の性悪説についてもっと深い洞察をしたわけである。老子の自然の流れに身を任そうとする無為思想と孔子の人為的努力による仁徳思想がこの董仲舒時代になってうまく実を結んだことが伺える。

魏晋南北朝時代

後漢末期の黄巾の乱からはじまり、中国は再び分裂し、また北方の騎馬民族の絶え間ない中原進出に伴い、四百年ぐらい不安定な局面に入るが、儒学、玄学、佛教の三教が対立し融合する時代でもあった。

社会が不安定化すると儒学の主流文化は再び危機に直面し、隠遁した元の貴族官僚を中心として三玄（周易、老子、莊子）思想に対する探究が深まった。また、佛教の般若の空理論や涅槃学などについての理解が深まるにつれて佛教の深遠な哲学思想は道家達の世界観と人生観に共鳴できるところが多く、お互いに相手に深い影響を及ぼすようになった。

隋唐時代

騎馬民族であった隋文帝は南北朝を統一した後、各地域に佛塔を立てながら佛教の普及を図った。また、中国史上初めて科挙制度を導入したのでその基盤となった

儒学も大繁栄期を迎えた。唐高祖李淵と唐太宗李世民は一方では隋のこのような制度を踏襲しもっと改良しながら、他方では老子（本名は李耳）を自分の祖先であるという大義名分で道家思想も提唱し、各地域に寺院と道院を設置するのを義務化した。それにより唐代の儒道佛思想は大融合時代を迎え、繁栄した盛唐文化は周辺諸国にも大きな影響を与えた。

しかし、長らく繁栄した唐も末期になると官僚が腐敗し、庶民への課税負担も多く、経済は衰退する。国の財政が乏しいのに、天台宗、華嚴宗、北禪宗などは寺院経済を形成し非常に豊かで潤っていた。僧の義務兵役免除、寺院経済の免税および有名和尚の国師待遇への国庫負担も大きく、結局武帝は佛教を弾圧し、寺院の財産をすべて没収し、僧を還俗させたので、佛教は大きな打撃を受けることになった。しかし、唯一六祖慧能による南禪佛教はこの難を逃すことができたが、それには以下のような理由があった。

「身是菩提樹 心如明鏡臺 時時勤拂拭 莫使有塵埃」という神秀の「漸修」的詩に対して「菩提本無樹 明鏡亦非臺 本來無一物 何處惹塵埃」という「頓悟」的偈で慧能は五祖弘忍の跡継ぎとして認められたが、神秀の嫉妬のために南に逃走し、長らく隠居生活を送った後、広東地域を中心として南禪宗を確立し、民衆の中でその悟りを伝えた。

インドから伝わった佛教は当時様々な宗派に別れ、非常に難解な佛教用語で解釈された。そもそも庶民を煩惱から救おうとする佛教理念から離れ、逆に統治者階級に道具として利用され、庶民に接近しにくいものになった。それに対して「衆生皆有佛性」、「文字不立、直指人心」、「農禪並作、自食其力」、「行住坐臥皆是禪」という南禪宗の特徴は庶民に非常に分かりやすく実践的なものであった。すなわち、悟りには貴賤がなく、聖人が残した学問を通じた真理への探究は役には立つが、逆に学問自体にはまると悟りの邪魔にもなりうるので、実践を通じて真の自分にもっと近づけようという革新的な考え方であった。それまでには布施によるインド式の佛教の考え方が当たり前であったが、自分の労働によって生きることすべてが禪であるという慧能の教えは宋代の新儒学や明代の陽明学にも大きな影響を及ぼした。

宋元時代

北宋の中ごろから程頤による性即理説、程顥の天理説、周濂溪の太極図説、張載の気の哲学説などを代表とする道家思想をベースとした新儒学が現れた。後世には理学と呼ばれるようになるが、南宋時代の朱熹はそれらを儒学独自の視点に基づいて、壮大な学問体系として仕立て上げた。朱子は、理は根本的実在として気の運動

に対して秩序を与えるとする「理気二元論」の立場に立つ存在論から、人間の心は宇宙と同じく「理」を持っているが、肉体的な要素である“気”の制約を受けているので、不完全であると認識した。そして「性即理」という立場から「修身齊家治國平天下」という実践論を唱えた。「性即理」の「性」とは心が静かな状態であり、この「性」が動くとき「情」になり、さらに激しく波動しバランスを崩すと「欲」となる。「欲」までに行くと心は悪となるため、たえず「情」を統御し「性」に戻す努力が必要であるというのが、朱子学の説いた実践倫理であった。そこでは、個人と社会、個人と宇宙は、理という普遍的原理を通して結ばれており、自己修養による理の把握から社会秩序の維持に至ることができるとする、個人と社会を統合する論理一貫した思想体系が確立された。人間主観の不完全性を自覚し、具体的には主観的内的洞察に留まらず、客観的な物事の理を探究する「格物窮理」という能動的な方法論を提示したのが特徴的で、個人の悟りをメインとする佛教に対して猛烈な批判を行った。朱子学は続く元代には科挙試験が準拠する経書解釈として国に認定され、官学として大変重要な役割を果たした。

明清時代

陽明が生きた明の時代に朱子学は科挙制度と密接に結びつき、体制教学の地位をゆるぎないものにしていった。そのため、科挙を目指す知識人にとって朱子学は共通の学問であり、それを学ぶのは当たり前の常識であって、すでに体制擁護の学問に転落し、朱子時代の道徳主義的側面が失われ、形骸化していた。

陽明も朱子学を学問人生の出発点にしていたが、それは単なる学問的な勉強だけではなく、「格物窮理」を真剣に実践しようとしたところで「龍場の悟り」を得て、「心即理」という認識論と「知行合一」という実践論を展開した⁷。

朱子が人間の心を本然之性（性）と氣質之性（情）に分けて、前者のみが「理」であるとしたのに対して、陽明は性と情を合わせたのが心であり、そのものが「理」に他ならないと主張し、以下のような有名な「四句教」を残した。

「無善無悪是心之体 有善有悪是意之動 知善知悪是良知 為善去悪是格物」

すなわち、理そのものである心は善悪という二元性を超えたものであるが、意（心の動き）により善悪が生まれる。そしてその善悪を知るものが良知であり、良知によって人欲を正すことが格物ということであった。

格物という具体的な方法論においても、朱子学においては読書や静坐を重視した

⁷ 王陽明の『伝習録』は下記のサイトで閲覧できる。
<http://www.zggdwx.com/zhuanxi.html>

のに対して、陽明は日常の生活や仕事の中で良知を磨く努力をしなければならないという「事上磨錬」を主張した。認識と実践の関係において「知行合一」を主張したが、「知」と「行」、つまり認識と体験とは一体不可分のものであって、「知は行の始まりであり、行は知の成なり」とした。

また、陽明は「天理を存し人欲を去る」という朱子学的な側面を肯定しながらも人欲を自然なものとして否定もせず、中庸的な立場をとったのは董仲舒やスミスの考え方に近かったことがわかる。

そして「満街これ聖人」、すなわち、街には聖人が充ち満ちているという頓悟的な理解からも陽明の認識論や実践論は六祖慧能にも酷似していることが伺える。

清代になると顧炎武などを代表とする経験的・実証的傾向をもつ経世治用の経学が台頭した。また、アヘン戦争をきっかけとして康有為らによる変法運動が起こり、清朝政府を倒すための革命運動の動きが活発化したが、その代表的人物が「中国革命の父」と呼ばれる孫文であった。彼の思想をまとめたのが『孫文学説－知難行易』であった⁸。

『孫文学説－知難行易』において孫文は「知」と「行」の関係について以下のよう

- 1) 三つの段階：不知而行（知らずに行動、不知不覚者）、行而後知（行動の後に知る、後知後覚者）、知而後行（知った後に行動、先知先覚者）。

写真1：孫文と梅屋庄吉夫妻



出所：長崎港松が枝国際ターミナルにて筆者撮影。

⁸ 下記のサイトより全文を読むことができる。
<https://zh.wikisource.org/wiki/%E5%BB%BA%E5%9C%8B%E6%96%B9%E7%95%A5/%E5%BF%83%E7%90%86%E5%BB%BA%E8%A8%AD>

- 2) 知難行易：一般的に不知不覚者が大部分で、後知後覚者は少数で、先知先覚者は極わずかである。
- 3) 有志竟成：志を持って実践すれば必ずなり遂げられる。

すなわち、孫文は陽明学に近い人本主義的な立場に立ちながらも、混乱した社会情勢の元では知ろうが知るまいが、とりあえず行動する大事さを主張した。また、『三民主義』（1924）において彼は次のように述べながら、皆で協力して共同で中国革命を支えるべきだと主張した。

「第一種の人（先知先覚者）は発明家であり、第二種の人（後知後覚者）は宣伝家であり、第三種の人（不知不覚者）は実行家である……。したがって、世界における進歩はすべてこの三種の人にかかっている。」⁹。

人間の本质に対する深い洞察を経て、時代の流れの変化を察知した彼は実際医師という安定した職業を捨てて、波乱万丈の革命的な人生を選択した。祖国のために誓願を立てて一生懸命頑張る勇氣ある行動に感銘を受けた梅屋庄吉らの支援を受けながら、彼は結局三百年近く続いた清朝を倒すことができた。

近代

中国建国の父と呼ばれる毛沢東も「知」と「行」の関係について深い研究を行い、また中国革命の実践の中での経験をまとめて『実践論・矛盾論』（1937）を発表した。その中身は基本的に教条主義と盲目的実践主義に対する批判であった。すなわち、陳独秀、王明などの海外留学派のマルクス理論に忠実に従おうとする理論派と旧ソ連の経験のみを重視し、中国の現場の実態を無視して硬直的な指導を行おうとしたエリートコミンテルンに対して徹底的な批判を行った。結局彼は中国当時の現場から出発し外国の先進的思想や経験を吸収しながら、ソ連の革命経験と正反対の「農村から都市を包囲する」という現実的な政策を貫き、結果的に中国を統一した。

福沢諭吉と東洋思想

孫文と同じ時代を生きた福沢諭吉の学問的・思想的源流も儒学であり、朱子学や陽明学の影響も多く受けた。しかし、長崎遊学や欧米の視察を通じて時代の流れの変化を察知し、東アジアの平和と安定を支えてきた儒学がすでに空論に変わり、却って邪魔をしていることに気づき、脱亜論を主張したが、それは彼の良心宣言であっ

⁹ 『三民主義、下』（1924）「第五講「権」と「能」の区別」22～24頁より引用。

たと思われる。

『学問のすすめ』の中で彼は「すなわちその第十五編「事実を疑て取捨を断ずる事」と題する一文に、先ず「信の世界に偽許多く、疑の世界に真理多し」と書き出して、「文明の進歩は、天地の間にある有形の物にても無形の人事にても、其働の趣を詮索して真実を發明するに在り。西洋諸国民の人民が今日の文明に達したる其源を尋れば、疑の一点より出でざるものなし」という。「之を彼の亜細亞諸州の人民が、虚誕妄説を輕信して巫蠱神仏に惑溺し、或は所謂聖賢者の言を聞て一時に之に和するのみならず、万世の後に至て尚其言の範圍を脱すること能はざるものに比すれば、其品行の優劣、心志の勇怯、固より年を同して語る可らざるなり。……人事の進歩して真理に達するの路は、唯異説争論の際にまぎるの一法あるのみ。而して其説論の生ずる源は疑の一点に在て存するものなり。疑の世界に真理多しとは蓋し是の謂なり。」¹⁰と論じて、日進月歩な進歩を遂げている西洋文明の原因はすべて「常識を疑うこと」という一点から出ているとしている。同時に依然として東洋の旧習に妄執して、時代の変化を無視しているアジアの人々の強引な傲慢さに対して一喝した。特に、「畢竟、支那人が其国の廣大なるを自負して他を蔑視し、且数千年來、陰陽五行の妄説に惑溺して、事物の真理原則を求るの鍵を放擲したるの罪なり。」¹¹と論じながら、儒道佛思想のルーツを持つ清国の近代化への怠慢ぶりを徹底的に批判した。

また、「支那の儒者も孔孟の道を尊び、日本の儒者も孔孟の書を読み、双方共に

写真2：長崎光永寺前の福翁の石碑



出所：長崎光永寺前にて筆者撮影。

¹⁰ 小泉（1966）126～127頁より引用。

¹¹ 福沢論吉選集第五卷（1981）「時事小言第四編」258頁より引用。

其教の源を同ふして、¹²⁾と述べ、儒家のそのルーツは同じであると認めた上で、「斯くまでに私が漢学を敵にしたのは、今の開国の時節に陳く腐れた漢説が後進少年生の脳中に蟠まつては、迎も西洋の文明は国に入ることが出来ないと、飽くまでも信じて疑はず、如何にもして彼等を救出して我が信ずる所に導かんと、有らん限りの力を尽くし、私の真面目を申せば、日本国中の漢学者は皆来い、乃公が一人で相手にならうと云ふやうな決心であった。¹³⁾と語っているところからわかるように、彼の脱亜論は実はアジアを救うための入亜論であったことが伺える。

IV 「知行合一」とは何か

この節では、ジョハリの窓という概念を参照しながら、「知行合一」の真髓に対する筆者の理解を述べたい。

表1：ジョハリの窓

	自分が知っている自分	自分が知らない自分
他人が知らない自分	① 秘密の窓 (Hidden Ego)	④ 未知の窓 (Unknown Self)
他人が知っている自分	② 開放の窓 (Open Ego)	③ 盲点の窓 (Blind Self)

出所：ジョハリの窓を参照に筆者が作成¹⁴⁾。

人間は生まれてまず親や家族関係を通じて社会や自然に対する認識を深めるが、最初は自分の生存本能のために Hidden Ego の状態で暮らす。しかし、幼稚園生活から始まる儒学システムの伝統的な人間共同生活のために徐々に自分を開放し、Open Ego の状態に進む。そして他者との共同生活の中で他者を通じて自分自身に対する理解を深める Blind Self 状態に進化する。このようなプロセスを経て最終的には本当の自分自身の本質に気づくことができるはずだろうが、孔子はそれを「五十知天命」と表現しただろう。

しかし、人間はそれぞれ先天的に与えられた気質や後天的な環境の影響で実はそのパスは千姿万態である。優れた先人たちが暮らしの中で悟った智慧は文字で記録されると知識になるが、その知識は常識となり、安定した時代には社会の平和と発展を促すが、時にはその常識が単なる既得利権のために使われるとそれは「封建思想」となり、社会の発展を妨げる。朱子学の時代に来て基本的には「格物至知」と

¹²⁾ 福沢諭吉選集第五巻（1981）「時事小言第四編」259頁より引用。

¹³⁾ 福沢諭吉選集第十巻（1981）「福翁自伝王政維新」210頁より引用。

¹⁴⁾ 心理学者 Joseph Luft と Harry Ingham が1955年に発表した一つのモデル。

いう帰納法的接近（実践から良知へ、①から④へ）であったのに対して、陽明の「至知格物」という演繹的な方法論（良知から実践へ、④から各ブロックへ）は革命的なものであった。

しかし、良知を知るとするのは至難の業である。中国の北方地域で生まれた私はきついウォッカが大好きであって、かつては南方地域の紹興酒の味が大嫌いであった。しかし、日本に長らく居住しながら日本酒が段々好きになった後、紹興酒の味の妙味が理解できるようになった。また、ロンドン大学留学中にはワインにハマって留学後日本に戻ったら日本酒からワインに切り替えようと思っていたが、日本に戻るとやはりなぜか日本酒のほうが美味しい。人間はやっぱり環境の産物である。佛教の縁起説や道家の無為自然という考え方は自然という大環境から人間という個人に演繹的に接近する。この時には直感が大事であろう。それに対して儒学や科学は部分から全体という「格物窮理」的な帰納的な方法で漸進的に周辺環境への理解を深めるが、この際には理性がもっと大事になると思われる。しかし、自然科学の研究が進むにつれて暗黒物質と暗黒エネルギーの存在の発見や多重宇宙説も登場するようになり、実は宗教と科学は二つではないことが明らかになりつつある。われわれ人間自身が儒学、科学や宗教の常識の囚人になっていないかどうかを常に疑うことは大事であろう。ハーバード大学の脳科学者ジル・テイラー博士（2009）の実際の体験談は大変興味深いことを示唆していると思われる。

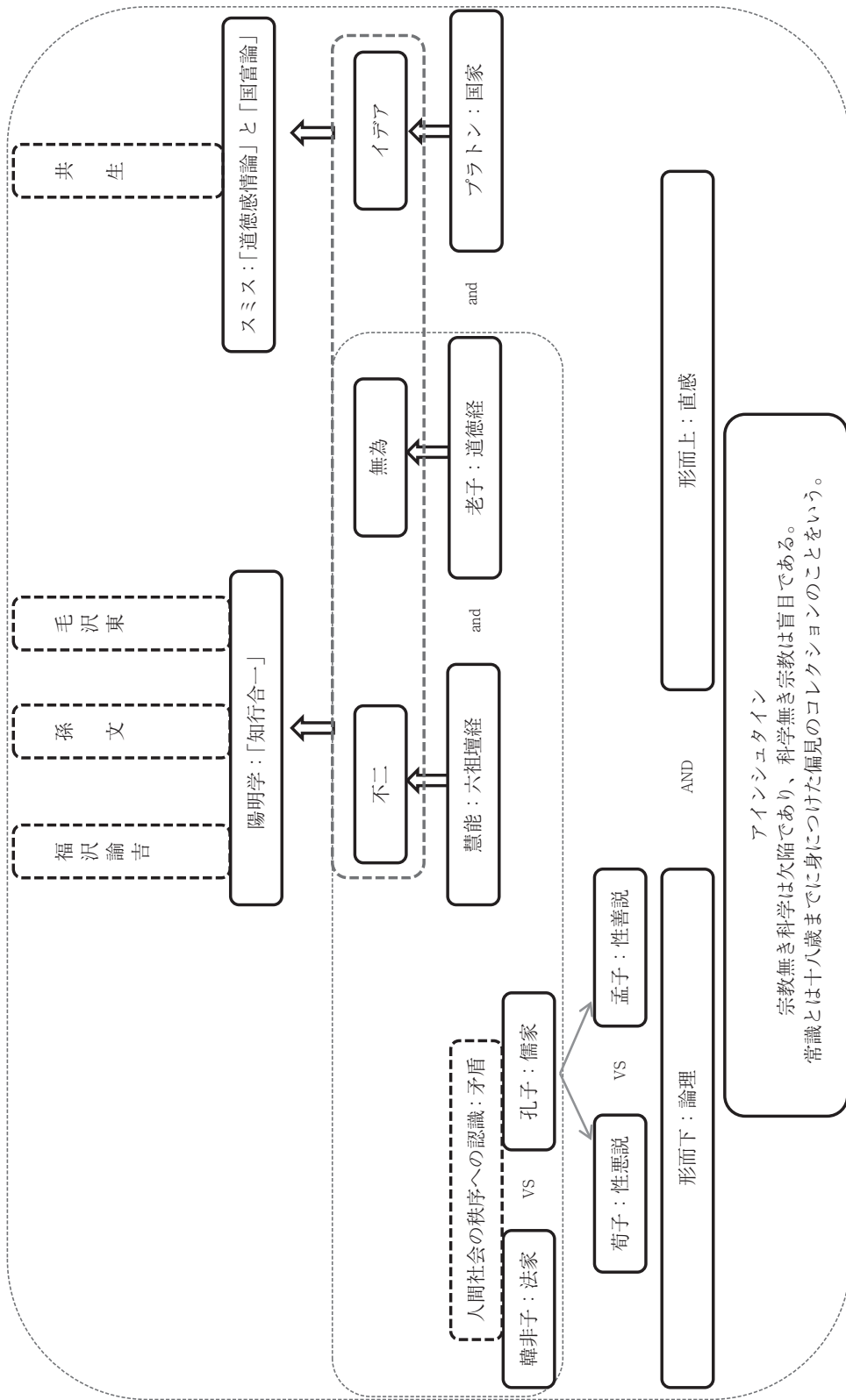
V おわりに：中庸とは何か

そもそもスミスの思想哲学はプラトンに由来するところが多く、プラトンの『国家』（BC370年頃）第7巻における「洞窟の比喩」は大変興味深いものである。後期のプラトンは結局、外の太陽（可知界）を見た哲人が再び洞窟（可視界）に戻ることを語った。本論の分析から分かるようにスミスの『道徳感情論』と『国富論』はまさに二千年前のプラトンの復帰であることが分かる。

東洋の老子における「道（知）」と「徳（行）」、孔子における「仁」と「修身齊家治國平天下」、佛教における「不二」と「八正道」は結局董仲舒や六祖慧能を通じて二千年という時の流れを乗り越えて再び陽明の「知行合一」に至ったが、それも結局認識論をベースにした実践論であることが分かる。

そもそも「東」と「西」という概念の分離はスミスの『国富論』における「分業」に値するもので、結局「見えざる手（市場）」を通じて再び結合し、新しいひとつの「東西」に統合される。統合される必要条件として二元性を認識する理性が必要

図1 中庸とは何か



であり、それが保証できる十分条件が「内観」（二元性を超える智慧）であろう。すなわち、「智慧」さえあれば、「東」も「西」も存在しない。「東西不二」という帰無仮説はそもそも単なる幻にすぎず、今回の作業では結局その帰無仮説を棄却することができなかった。

中国語で「目が覚める」という時に使用される漢字『覺』には二つの意味がある。JUE と読むときには目が覚めると意味で、JIAO と読む際には寝るという意味である。すなわち、漢字という無言の立場からすると寝ることと覚めるということはコインの両面と同じであるが、人間の分別心からするとまったく異なるものになる。そしたら、人間の分別心が悪いかというところでもなく、分別することで「夜は寝ながらエネルギーを充電し、昼は起きて放電しながら」効率よく仕事をして、より豊かで平和な世界を築き、幸せな人生を送ることができるだろう。それを老子は「天人合一」、孔子は「仁」、佛教では「不二」という表現を用いたり、スミスは『国富論』で「見えざる手」という概念を用いたりしたと思われる。『経済』という言葉は東晋時代の道教研究家である葛洪の『抱朴子』にルーツを持ち、「世の中を効率よく経営し、民を救済する」という意味である。スミスの後輩であるアルフレッド・マーシャルの表現を用いると「Cool Head, but Warm Heart」になる。しかし、ジル・テイラー博士も指摘しているように、左脳による人間の欲望が度を過ぎると、人間自身が本当の自分自身を失い、矛盾だらけの社会の奴隷になってしまって、ハッピーな今を生きることができない。プラトンは正義というのは、「智慧、勇気、節制」にあると主張したが、「智慧」に達する具体的な方法としては、読書、坐禅や仕事などの様々な実践がありうるだろう。そしてそこから権力者の腐敗や無能などを叱責できる「勇気」が生まれ、そして自分を「節制」することで本当の幸せを獲得できるだろう。老子の三宝である「慈悲、儉約、謙虚」とよく似ていることが分かる。

「経済学科」が「実践経済学科」に変わり、間もなく一年が経とうとしている。様々な前向きな改革的な動きがあり、停滞した雰囲気を変えようとしている。もっとも特徴的な一つが「しまなび」プログラムであり、離島をたくさん抱えている長崎県の地域課題に対して大学が官民ともに協力しながら、地域課題に取り組むことができる人材の育成を目指している。地域の公益大学として地元への貢献を目指し、PBL（project based learning 課題解決型）学習法の導入による「しま」での実践的な体験学習を通じて若手人材を育成するという斬新な動きであり、立派な試みであると思われる。しかし、経済の効率性を無視して千篇一律で行われるこのような事業の持続性には疑問点や課題も多い。実践を繰り返しながら、もっと合理的で地

元のニーズに合うプログラムにバージョンアップできることを期待したい。

また、都市に向かう若手人口の社会移動を止めるために政府が進めている地方大学改革の動きに合わせて、県内就職者比率増加の具体的な数値目標の提示などの官僚組織からの圧力には理不尽なものも多い。しかし、これをきっかけに大学が地元企業との有機的な連携を強化することで、今まで忘れていた地域文化や潜在力の再発掘に繋げる可能性は大きくなると思われる。

写真3：長崎港松が枝国際ターミナルに入港した上海発のクルーズ船



出所：長崎港松が枝国際ターミナルにて筆者撮影。

その他にも「新聞を活用した実践的学習」などのプログラムも導入されているが、自分の学生を結局自分の大学で卒業させることができず、某新聞社に任せるという恐れも出てきている。何のための実践であるのか、官僚たちの妄執のためか或いは大学教員の無知への教育のためかそれとも学生や地方地域のためか。現場に合わないプログラムを即撤廃する勇気は我々にあるのか、それとも官僚のエゴのままの指示にそのまま従って自分の安全のみを守るのが賢明であろうか。

「経済学部」から「地域創造学部」に名前が代わり、確かに色んな前向きな変化が起きている。官舎から大学に通う道がかなり綺麗になったので、よく「外観」してみると、新任の一人の教員が毎朝黙々とゴミ拾いをしていた。「実学」とは華麗な大義名分ではなく、このような日常茶飯事の些細な事から始め、シンプルで自然ありのままに生きるよう導いてくれるものではなかろうか。大学院生の頃、京都で長くお世話になっていた矢野会長になぜ創業したか聞いた時、返ってきた答えは意外と淡々としていた。「飯を食うために」。道（アイデア）は遠方にあるのではなく、我々のすぐ足下にあるかもしれない。

すでにアジア大航海時代が始まっている現代、福翁が長崎におられたら何を言うだろうか。

長崎という歴史物語が多く、国際色が豊かなローカルにしっかり根を下ろし、グローバルな視点で世界に向けて長崎の比較優位である「平和」（儒学的な立場からすると「共生」と解釈できる）という情報をもっと発信できるターニングポイントに生まれ変わることを心より願いたい。

参考文献

- アダム・スミス（1759）、水田洋訳（1873）『道徳感情論』、筑摩書房。
- アダム・スミス（1776）、山岡洋一訳（2007）『国富論：国の豊かさの本質と原因についての研究』、日本経済新聞出版社。
- 大西広（2003）「序論 鄧小平路線の歴史的意味」『中国経済の数量分析』（大西広・矢野剛編）、世界思想社。
- 小泉信三（1966）『福沢諭吉』、岩波書店。
- Jill Bolte Taylor（2009）、竹内薫訳（2012）『奇跡の脳—脳科学者の脳が壊れたとき』、新潮社。
- 下記のサイトより彼女の講演の映像を直接見ることも可能である。
- https://www.ted.com/talks/jill_bolte_taylor_s_powerful_stroke_of_insight?language=ja
- 孫文（1924）、安藤彦太郎訳（1957）『三民主義』、岩波書店。
- 堂目卓生（2008）『アダム・スミス—『道徳感情論』と『国富論』の世界』、中央公論新社。
- 富田正文・土橋俊一編（1981）『福沢諭吉選集』、岩波書店。
- 毛沢東（1937）、松村一人・竹内実訳（1957）『実践論・矛盾論』、岩波書店。
- プラトン（BC370年頃）、崔光烈訳（2014）『国家』（韓国語）、「美しい日」出版社。